
quake

黒木猫人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

quake

【Nコード】

N4949E

【作者名】

黒木猫人

【あらすじ】

津軽京介はある日、幼馴染の如月花凜に告白される。京介にとって、花凜は女というよりも男友達のような存在であり、戸惑うのだから……。その夜、全てを引き裂く出来事が京介達を襲う。

そいつはいつも、俺がいざ朝食を食べようという時にやってくる。ピンポン、と洋間に響くチャイムの音。

「京介、ほら、花凜ちゃんが迎えに来たわよ」

台所に立っている母さんが、顎で俺に玄関に行くように促す。

「……たく、いつも狙いましたかのように」

毎朝毎朝、箸を手を取ったところでチャイムが鳴る。わざと箸を取るタイミングをずらしたことがあるが、それでもやっぱりチャイムは触った瞬間に鳴った。時々、隠しカメラの存在を疑いたくなる。玄関の扉を開けると、

「おっす、京介！ 学校行くぞっ！」

幼馴染の少女の馬鹿みたいな満開スマイルがそこにあった。

ウェーブが掛かっているというか癖っ毛の長い髪をポニーテールにしている。陸上で鍛えた身体は、スタイルがいいと言えは聞こえはいいが、腹が立つのでとりあえず引き締まったボデーという言葉にまとめておく。ボディーではない。あくまでボデーだ。ここ重要。名を如月花凜きさらぎかりんという。

「先に行け。俺は朝飯をじっくりゆっくり味わってから、爽やかな朝日を堪能しつつ、のんびりと登校する」

「二人で早く行って、百メートル走勝負しようぜ！ 今日こそアタシが勝つ！」

「人の話聞いてねえだろ」

子供みたいにはしゃぐ花凜の制服のスカートが、動きに合わせて無造作に翻る。だが、これでも一応、俺と同じ高校三年生である。もう後数年で成人だというのに。親でなくても行く末が心配になる。「京介、いいから早く飯食ってこいよ。アタシ、ここで待ってやるから」

そう言って玄関に上がり込む花凜。俺はため息をついた。

「はいはい、分かりましたよ。分かったから、そこで少し大人しくしてろ」

「おう」

にかつと白い歯を見せる。全く、笑顔だけは褒めてやりたいくらい爽やかな奴だ。

まあ……いっか。とりあえず、早く飯を食おう。

「まだかー、京介ー」

「早えよッ！ あれからまだ一分も経ってねえだろうが！」

朝食を三分で平らげた俺を誰か褒めて欲しい。

「あははっ、京介、ほっぺたにご飯粒付いてんぞ？」

さらに願うなら、人の顔を見て笑ってるこの馬鹿を誰か殴ってやって欲しい。

通学路は早朝ということもあって、人通りもほとんどなく、時折乗用車が通過するのを除いては静かなものだった。いや、俺の横を歩く花凜も除いてか。

「っーか花凜、何でお前はいつもいつも俺が朝飯をおうというタイミングで来るわけ？ ある意味恐怖を覚えるぞ」

「ふふん、京介の行動なんかお見通しさ。何年の付き合いだと思ってる」

俺——つがる きょうすけ津軽京介と花凜は、たまたま住んでいる家も近く、たまたま母親同士が知り合いだったこともあって、幼い頃、それこそ赤ん坊の頃からよく遊んでいた。

そうして同じ小学校に入学し、同じ中学校に行き、同じ高校に進学するという過程を経て、今に至るというわけだ。ここまで来ると、もはや腐れ縁であろう。

「そうか、考えて見ればお前、小学校の時から毎朝俺を迎えに来てるのか。よく飽きないな」

「大いに感謝しろよ？」　こんな美少女と毎朝通学出来てるんだか

らさ」

「自分で言ったりや世話ないよ、全く」

どうせならもっと、女の子らしい女の子に迎えにきて欲しかった。そう、彼女のように。

「京介くん！ 花凜ちゃん！」

腰くらいまである黒いストレートロングのさらさらヘアーが風になびく。肌は百合の花のように白く、整った顔立ちを引き立て、高校の制服に包まれた肢体は優しいラインを描き、そこはかとなく清楚な雰囲気漂わせている。

「おはよう」

いつもの十字路で待っていた桜庭愛菜さくらば あいなは、俺達に分け隔てない笑顔を振りまいた。

「おっす、愛菜！」

「花凜ちゃん、今日は何だか機嫌いいみたいね？」

「あ、分かる？ 今日百メートル走のタイム計る日でさ。今度こそ京介に勝ってやるんだ」

「ふふっ、なるほど、それで」

花凜とは似ても似つかぬ可愛らしい笑みを零す。

本当の美少女とはこういう子のことをいうのだ。うんうん。

もっとも、彼氏持ちではあるが。

愛菜の横に立っているツンツンヘアーの男子が俺を見て、「よっ」と軽く手を挙げた。

「翔、俺は今、猛烈にお前が羨ましい」

「は？ 何だよ、いきなり」

はまな しょう

浜名翔。花凜、愛菜と共に俺の幼馴染の一人で、幼稚園時代からの腐れ縁という名の鎖で繋がれた友人だ。背が高く、いかにもスポーツマン風の爽やかな容姿が示す通り、サッカー部に所属、しかも部長をやっている。そして先にも言ったが、愛菜の彼氏である。

「いや、愛菜の家が俺の家と近かったらなあ、って話」

俺の言葉に翔は苦笑し、

「その代わりに、お前の家は花梨の家と近いじゃないか」

「本気でそう思ってるなら、一度精神科で診てもらった方がいい」

こんなことなら、半年前に翔が愛菜に告白するのを手伝うべきじゃなかった。実に惜しいことをしたと思うよ、全く。

ふと、愛菜が俺に声を掛ける。

「ねえ、京介くん。この間の古典の宿題やった？」

「ああ、けど、分からない問題がいくつかあってさ。学校行ったら教えてくれないか？」

「うん、いいよ」

「あっ!？」

花凜が驚いたように目を丸くする。

「古典の宿題なんて出てたんだっけ!？ やばっ! 京介、後で答え写させて!」

「やってねえのかよ! 昨日の帰り道、散々忘れんなって言っただろうが!」

「えっ、昨日話してたのって、そのことだったの!？」

「そもそも理解してなかったのかよッ!!!」

あれだけ注意したというのに。教えた俺としてはかなりショックだ。

愛菜の肩に手を置いた。

「……愛菜」

「うん？」

「後であいつにお前の爪の垢を煎じて飲ませてやってくれ」

「ひでえ! アタシそこまで!？」

花凜が喚く。

「やかましい! 全く、お前という奴は! もう少し落ち着いて人の話をだな——」

翔が呆れた表情で言う。

「おっ、始まった。いつもの夫婦漫才」

「誰が夫婦かッ!!!」

俺が怒鳴る横で、花凜は後ろ頭を掻き、

「いやー、照れるぜ」

「褒められてないからね！？ 言っとくけど！」

ていうか、愛菜まで笑ってるし。恥ずかしいったらありやしない。大体、俺と花凜は付き合ってたのではない。

花凜はあくまで俺の幼馴染で、友達だ。女というより男友達みたいな感覚で、向こうも同じように思ってるだろう。それに俺はどちらかというと、愛菜みたいな女の子らしい女の子がタイプなわけで。

「あー、もう！ とにかく学校行くぞ！ 朝練があんだろ、朝練！」

「あははっ、京介が怒ったー！」

「花凜、あんまり茶化すな。京介は今、難しい年頃なんだ」

「ふふっ、翔くんも同じ年じゃない」

とにもかくにも、俺達はこんな感じの幼馴染四人組である。

空を見上げると、今日も快晴の青空。

いつものように、どこまでも澄み渡った、雲一つない、鮮やかな青色だった。

「位置について、よーい——」

後輩がスタートフラッグを上げる。俺と花凜は同時に走り出した。放課後、学校の校庭は夕陽で朱色に染まり始めている。肌に触れる風も少し、冷たさを帯びてきていた。

俺が陸上部に入ったのは、三年前、高校に入学してから一ヶ月くらい経った頃。中学までは翔と共にサッカー部に所属していたのだが、翔がレギュラーとして活躍する一方、俺は結局、最後まで補欠のままだった。そんなことから高校に行ってもサッカーを続ける気にはなれず、帰宅部を決め込んでいたのだが、そこへ花凜が手を差し伸べて来た。

『京介、足は速いんだからさ。陸上部に入れればいいじゃん』

何故その時、陸上部に入ろうと思ったのかは、未だに分らない。

しかし夕日に包まれる中、風を切るこの感覚は、なかなかどうして悪くない。

花凜より先にゴールラインを越える。百メートル走勝負は、俺の勝ちだった。

「くうー！ 京介にまた負けたあ！」

「……馬鹿。女子と男子じゃタイムの基準が違うだろう」

息を整えて、体操着姿の花凜を見やる。悔しそうに頭を抱えていた。

しばらくして、タイムを計っていた顧問の先生がやってくる。その顔は満足げだ。

「二人共、かなりいいタイムだ。この調子なら鷹上^{たかじょうだい}大学にも推薦で行けるぞ」

鷹上大は陸上競技で有名な大学だ。特に短距離に関してはオリンピック選手も数多く輩出している。

人間やれば出来るものだなあ、とつくづく思う。陸上なんて、花凜に誘われるまでは見向きもしなかったのに。

その後、各部員のタイムを計り終えたところで、今日の部活の練習は終わりとなった。

水道の所に行って頭から水を被る。顔も洗い、近くに置いておいたタオルを手探りで探していると、

「ほらよ」

声がして、それを手渡された。

「ん、サンキュ」

髪と顔を拭い、視界に捉えたのは花凜だった。

花凜は俺にタオルを持たせ、自分も顔を洗う。水道の水を止めたのを見計らって、俺は同じようにタオルを手渡してやった。

「あーあ。今日も京介に負けちまった。速過ぎだったの」

「だから、男と女じゃタイムの基準が違うだろ。女子のタイムなら、

お前も相当速いぞ」

「関係ねえ！ アタシは京介に負けたのが悔しいんだッ！」

両手を振り上げ、喚く花凜。本当、女というより男友達みたいな奴だ。思わず、笑ってしまう。

「一緒に鷹上大学行ったら、ぜーったいアタシの方が速くなってやるからな！ 覚悟しろよ！」

花凜が俺に人差し指を向ける。

「んー……残念だけど、それは出来ない」

「え？」

ああ、そういや、花凜にはまだ言ってなかったっけ。

「俺、一応、弁護士目指そうと思っててさ。だから、どっかの大学の法学部に行こうって考えてんだ」

花凜は最初、目を丸くしていたが、

「……ち、ちよつと待てよ！ そんなの聞いてないぞ！ 今、初めて聞いた！ り、陸上は！？ 陸上はもうやらないのかよ！？」

「慌てんなくて。陸上は好きだよ。だから、行った大学に陸上部があれば入ろうと思ってる。でも、鷹上には行かないって、それだけの話」

「そ、それだけって――」

何か言おうとして、花凜は黙り込む。俺はその様子に違和感を覚えた。

「花凜……？」

「……」

花凜は答えない。目を合わせようとしなない。夕陽の逆光で表情もまた、伺い知れない。

もう一度呼びかけようとしたところで、翔と愛菜がやって来た。

「京介、花凜、帰るぞー……何かあったのか？」

二人とも場の妙な空気に気付いたらしく、俺と花凜の顔を交互に見やる。

「別に」と答えたのは、花凜だった。

「何でもない。アタシ、着替えてくるから」
花凜は振り返らず、更衣室の方へ消える。愛菜が一度俺と翔に目配せしてから、花凜の後を追って行った。

「なるほど、それで」

男子更衣室で着替えながら、花凜とのやりとりの一部始終を話すと、翔は納得したように頷いた。

「何がるほどなんだよ」

「まあ、言ってもいいんだが、それじゃ何の意味もないからな。これはお前が一人で考えなきゃならないことだ」

俺は体操着を脱いで、無理やりバッグに詰め込む。

「何だよ、それじゃ話した意味ないじゃん」

「とにかく、頑張れってこった。俺は俺でこのチャンスを利用させてもらう」

「チャンス？」

聞き返すと、翔はポケットから小さな紙袋を取り出して、その中身を見せる。

それは、一つのペンダントだった。楕円形で、シルバーの装飾で縁取られ、青い表面には四葉のクローバーを模したマークが刻まれている。

「この間、街で偶然見つけて、愛菜に似合いそうだなって思ってたんだ。まあ、安物だけどさ。しかし、別に誕生日とかでもないのに渡すのも何だか気恥かしいというか、何というか……とにかく、二人きりで帰れるこの機会を利用させてもらうよ」

翔を見ていると、愛菜をいかに大切にしているかがよく分かる。こんな奴だからこそ愛菜も付き合うことを決め、サッカー部のマネージャーを引き受けることにしたのかも知れない。

「……って、ちょっと待て。お前らが二人きりで帰るってことはつまり……俺に花凜と二人きりで帰れと!？」

「当たり前だ。お前が自分で撒いた種だろう。明日までには仲直りしとけよ。じゃ、俺は愛菜と先に帰るからな」

「あっ、おい！ 翔、ちょっと！」

俺がまだ制服のズボンを履いている途中で、翔は更衣室を出て行ってしまった。

「……」

俺は、花凜になんて言葉を掛けてやればいいのだろう。

花凜は男子更衣室の前で壁に寄り掛かって、待っていた。

いつもの花凜と違って見えたのは、その表情が余りにも大人びていたから。こんな表情も出来るのか、と俺は驚きを隠せなかった。

「花凜……帰るか？」

「……うん」

とりあえず、学校から出ることにする。

その後も道中、花凜は黙り込んだままだった。二人並んで歩く帰路は、夕陽で真っ赤に染まっているにも関わらず、どこか精彩を欠いているように見えた。

「……別にさ」

そんな雰囲気嫌だったのかもしれない。無意識の内に、俺は口を開いていた。

「違う大学に行っても、俺達は何も変わらないだろ」

俺は前を向いたままだが、花梨が横で、顔を上げるのが分かる。

「十八年の付き合いで出来た腐れ縁は、切ろうと思っても切れるものじゃない」

「でも……！」

花凜が突然、足を止めた。

俺は振り返る。

今まで見たこともないような顔をした少女が、そこにいた。

「京介は大学に行ったら新しい友達を作る。新しい場所で、新しい

奴と出会って、新しい時間を過ごして、もしかしたら――」

少女は、

「好きな人だって出来るかもしれない」
泣いていた。

「花り――」

俺の言葉は、少女の次の一言で遮られることとなる。

「アタシ、京介のこと好きだ」

世界が一瞬、全ての刻を止めた気がした。

え？ 今、花凜、何て……？

俺のことが好き……？

……はは。おいおい、冗談にしては笑えな――

花凜の瞳が、俺の下らない思考を打ち砕く。

それは紛れもなく、真実しか映さない、俺の知らない、恋する乙女の瞳だった。

いや、俺の知らない、というのすら嘘だ。

俺は知っていた。物心付いた時から花凜が見せるその瞳の意味を知っていた。知っていながら知らないフリをしていた。し続けた。

花凜が愛菜と変わらない、女の子らしい女の子だってことも知っていた。知っていながら男友達みたいな奴だと自分に言い聞かせてきた。

そう、俺は。

ずっと前から花凜の想いを知っていた。

「京介は……どうなんだ……？」

何に対しての「どうなのか」なんて分かりきっている。

だが俺は、口を開くことが出来なかった。

答えは確かにあるはずなのに、掴んでも掴んでも、手から滑り落ちてしまう。

「……その……少し、時間をくれないか？」

結局、喉から絞り出した言葉が、それだった。

「……分かった。返事……待ってるから」

そのはにかんだ笑顔を見て、心臓の鼓動が速くなるのを感じる。

俺は明らかに動揺していた。

それから俺の家の前に着くまでの間、花凜と何を話したのか、よく覚えていない。妙な気恥かしさばかりが先行して、まともな会話になっていなかった気がする。

俺はもう、花凜を今までと同じように見れなくなっていた。

だから、俺の家の前で別れる時、振り返った花凜が艶やかに見えて、思わずどきりとしてしまった。

「じゃあ、京介。また明日な」

「あ、ああ」

花凜は小走りで行ってしまう。

明日の朝、俺は花凜とともに顔を合わせられるだろうか。
相変わらず、心臓の鼓動は速いままだった。

夕食を食べ終えた後、俺は自室のベッドの上で仰向けになり、天井を見続けていた。

「花凜が、俺のこと……」

身体はいつもより重いのに、気分はふわふわとしている。肉体と精神がズレているような感じだった。

正直、気分は悪くない。夏祭りの前日のような気分。

花凜のルックスは決して悪くない。いや、それどころか、鼻眉目に見ても美人の部類に入る。頭こそ良いとは言えないが、思いやりのある奴だし、結構可愛げのある奴だって、俺は知っている。意外に男子からの人気が高いってことも。欠点では決して色褪せない魅力を、花凜はたくさん持っている。

「って、何考えてんだ俺は……」

我に返ると、枕元の目覚まし時計の針はもう、深夜の1時を指そうとしていた。

そういえば、まだ風呂に入っていない。俺は着替えを持って風呂場に向かう。

ふと、部屋を出ようとした所で、何か落ちる物音がした。

見れば、棚に置いてある写真立てが、床に落っこちていた。

「あちゃー、壊れちゃったか」

写真立てを拾い上げる。表面のガラスカバーに無数のひびが入っていた。中身を取り出して確認する。

それは、高校の入学式の時に撮った、翔と愛菜と花凜と俺の集合写真であつた。

風呂から上がると、ようやく気分も落ち着いてきた。Tシャツとジャージのズボンを履く。牛乳を飲んで、歯を磨いてから、自室に戻った。

まだ、花凜に対する答えは出ていない。

でも、とりあえず、明日の朝は普通に花凜と接しようと思う。花凜と同じ時間を過ごせば、自ずと答えが出るかもしれない。そんな気がした。

「よし、寝るか」

明日も陸上部の朝練がある。そうだ、明日は俺から勝負を提案しよう。花凜の奴、きつと飛び跳ねるほど喜ぶに違いない。

明かりを消そうと、電灯から垂れ下がっている紐に手を伸ばす。

その時。

ズンッ、と床から突き上げられるような衝撃が走り、紐が揺れた。

「え……?」

それが地震だということはすぐに分かった。しかし、これは余りにも揺れが大きき――

「うわッ!？」

激しい縦揺れが来てバランスを崩し、ベッドに倒れ込む。立ってなどいられなかった。

生まれてから今まで、こんな大きな地震には遭遇した覚えがない。しかし、この揺れは恐怖の序章に過ぎず――

直後、想像を絶する横揺れに襲われた。

「な、何だよ、これ？ 何だよ、これッ！！！」

飛ばされまいと、ベッドのシートにしがみ付く。本棚が倒れ、窓がひび割れ砕け散る。電線が切れたのか、部屋は漆黒の闇に包まれた。

そして、ようやく震動が止まる。

最初に俺が感じたのは、全身の冷たさ。掌や背中が冷や汗でびっしょりになっていた。

震える足でゆっくりと立ち上がる。明かりは窓の外から差し込む月光だけが頼りだ。

妙に身体が傾いて、おかしいと思ったら、部屋自体が斜めになっていた。その事実気付いて、ぞくりと脊髄を恐怖が這い上がる。

「父さん！！！！ 母さん！！！！」

慌てて自室を飛び出し、両親の部屋へと向かう。

と、廊下で二人と鉢合わせになった。

「おお、京介、無事だったか」

「京介、けがはない？」

いつもの調子で話しかけられたので、俺は足の力が抜けて、その場に座り込んでしまった。

「京介！？」

「大丈夫、ちょっと安心しただけ」

やがて、パトカーや救急車の音が聞こえ、街が騒がしくなる。

俺と両親はとりあえず、身支度を整えて、外に出ることにした。宵闇に浮かぶ惨状を見て、俺は息を飲む。多くの家が倒壊していた。俺の家なんて地盤が傾いた程度で、本当にマシな方だ。やはり相当に大規模な地震だったらしい。

それから朝になるまで、俺は慌ただしく辺りを動き回った。近所で家の下に生き埋めになっている人の存在をレスキュー隊に伝えたり、救急車を呼びに行ったり、休む暇がない。

しかし、いまいち震災に合ったという実感が湧かなかった。

倒壊した民家の横を歩いても、何も心に訴えかけてこない。俺はこんなにも冷めた人間だったのだろうか。

携帯をポケットから出して、時刻を確認する。

2018年 6月22日 金曜日 午前7時24分。

辺りはすっかり明るくなっていた。携帯を閉じて、再びポケットに戻そうとするが、手が震えて上手く行かない。

「京介！」

顔を上げる。母さんがただごとじゃない様子で俺に駆け寄ってきた。

「花凜ちゃんが……！」

花凜が大けがをして、病院に運び込まれた。

俺は地震が起きてから今まで、その可能性をずっと否定し続けてきた。携帯メールも手が震えて送ることが出来ず、心の奥底に押し込めて、考えないようにしていた。

「京介くん、花凜の側に行っちゃって欲しくないか」

花凜の親父さんは病院に着いた俺に、それだけ口にした。

病室に入ると、そこは静寂に包まれた空間だった。県外の病院に移されたことで、花凜は一人部屋に入ることが出来たらしい。

花凜はベッドの上で上半身を起こし、窓の外を見つめ続けていた。

「花凜」

名前を呼ぶと、ゆっくりと振り返る。

「おう、京介か。何か用か？」

いつものポニーテールではなく、髪を解き、下ろしていた。包帯は巻いておらず、どこか外傷があるようには見えない。

「何か用って……お前が大けがしたって聞いたから」

「ははっ、別に死にゃあしないよ。この通り生きてる」

笑って言う花凜。

俺は、ほっと胸を撫で下ろす。意外に大したけがではなかったのかもしれない。

「全く、心配かけやがって。お前がいなくなったら毎朝誰が俺を迎えに来るんだよ」

「さあな。翔か愛菜辺りに迎えに来てもらえばいいんじゃないか？」

「馬鹿たれ。陸上部で勝負する相手は、代わりがない。俺に勝つんじゃないかったのか？」

「そうだったな……でも」

花凜が俺の目を見た。

「走れない」

「……え？」

「ワリい、京介」

その声は震えていて、

「アタシ……もう足無いんだ」

その時、俺は気付く。

花凜の下半身を覆っているシートが、不自然にへこんでいた。
両足の膝から先の部分がまるで正座でもしているかのようにな、無
かった。

「そん……な……」

『くっそー、キョースケはやっぱりはしるのがはやいなあ』

『バカ。おまえがおそすぎるんだよ。ふとってるんじゃないのか？』

『なっ、しつれいなこというな！ アタシはこれでもじゅうぶんに
ナイスバデーだ！』

それはまだ俺と花凜が小学校に入学する前、花凜が走りに関して、
俺に對抗意識を持ち始めたばかりの頃。

『おまえさ、かけっこごときでなにをそんなにムキになってるんだ
よ？』

いい加減しつこいな、と思い始めていた俺は、花凜に直接尋ねて
みた。

『アタシのゆめが、キョースケよりはやくはしれるようになること
だからさ！』

胸を張って言い放つ花凜。

『ゆめ？ オレにかつのが？』

『だってさ』

花凜は満面の笑みを浮かべた。

『はやくはしれれば、キョースケがどこにいったっておいつけるじ
ゃん！』

――その花凜の両足が無くなる。

そんなこと、あってはならない。あっていいはずがない。

だって、花凜はいつでも努力してきた。横で見てきた俺が一番よ
く知っている。

陸上に情熱を注ぎ続けて、遂には女子部員の中でトップまで上り
詰めた。

花凜にとって陸上は、生きがいそのものだったはずだ。

それがもう二度と走れないなんて。

花凜はまだ、俺を負かしてないじゃないか。

勝つんだろ？

俺に追いつくんだろ？

神様、何で花凜の足なんだ。

何でよりによって花凜の足なんだ。

余りにも残酷過ぎるじゃないか……！

花凜は窓の外に目をやった。

「京介、用が済んだなら、今日は帰ってくれるか」

「か、花凜……」

「頼むよ」

完全なる拒絶が、その言葉に含まれていた。これ以上何をしても、今の自分では無力なんだと思い知る。

「くッ……！」

俺は、逃げるように病室を飛び出した。

花凜は眠りにについている最中、地震に襲われたのだという。そして運悪く、崩れた家の瓦礫に足を巻き込まれてしまった。

何故、花凜でなければならなかったのか。どうせなら、俺の足が代わりに無くなってしまえば良かった。

病院を後にしてから、そんなことばかりが頭の中を飛び交う。そして、その度に悔しくて、涙が出た。

泣き疲れた頃、俺は母さんに言われていた通り、高校に向かうことにした。体育館が避難所として使われるのだそうだ。

県外はあんなに空が青かったのに、地元の空は淀んだ灰色に見える。

街には昨日までの面影なんて微塵も見られない。一面瓦礫の山だった。

その中で、俺は見知った人影を視界に捉える。

腰まで伸びた、さらさらの長い黒髪。見間違うはずがない。

「愛菜……？ 愛菜！」

駆け寄って、振り向かせる。

「京介くん」

「良かった、無事だったんだな。けがはないか？」

上から下に一瞥する。大丈夫だ、愛菜にけがはない。

「私は大丈夫。何ともないよ」

緑の上着に黒いスカート。胸元には、翔が昨日見せた四葉のマークの青いペンダントが輝いている。

「そうだ、翔は？ 一緒じゃないのか？」

俺が訪ねた、次の瞬間。

「……死んじやった」

愛菜の瞳から一筋、涙が頬を伝った。

「え……愛菜……今何て」

「死んじやった……翔くん。死んじやったの……」

愛菜が何を言ってるのか、俺にはよく理解出来なかった。

何で愛菜、泣いてるんだ？

何が「しんだ」って？

「しんだ」ってどんな字を書く？

「しんだ」って、一体何だ。

「おい、愛菜——」

涙を拭おうと、そっと愛菜の頬に震える手を伸ばす。と、愛菜は俺の胸に飛び込んで来た。

「翔くんが死んじやったああああああああああああああああああああああ——ッ！！！！ うわああああああああああああああああああああああああああああ——ッ！！！！」

しんだ？ シンダ……『死んだ』？

何が……いや、誰が。

イッタイ、ダレガシンダッテ？

「……信じない」

俺の胸の中で泣いているこの女は、一体何だ。

「信じない、信じない」

翔が死んだなどとほざいているこの女は、一体何だ。

[illegible]

お前は一体何なんだッ！！！！

「俺は信じないッ!!!」

2018年6月22日、午前2時03分。

日本静岡県を震源として発生した、後に『東海大震災』と呼ばれるこの大地震は、関東地方各地に甚大なる被害をもたらした。

マグニチュード10.6、最大震度7強以上。

死者は少なくとも15万人を超え、建造物は大破が25万棟、中破51万棟、一部破損48万棟、延焼火災13万棟、計138万棟以上に及んだ。

しかし、その当時の俺は、そんな情報を知らずとも、地震による傷跡の大きさを身をもって実感していた。

「京介、何か食べなさい。こんな時はちゃんと栄養を取っておかないと」

「分かってる」

母さんもそこまで強くは勧めて来ない。翔のことはもう耳に入っているらしかった。

一家全滅。

それは余りにも非現実的で、余りにも残酷な響きを持った言葉だった。原因は自宅の倒壊によるもの。駆け付けた愛菜はそれを目の当たりにしたという。

恐ろしい想像を振り払う。今は翔のことも、愛菜のことも考えた

くなかった。

顔を上げて、今いる場所が高校の体育館であることを思い出す。近隣に住む人達で、室内は溢れ返っていた。息苦しくて仕方がない。

「どこに行くの、京介」

「外の空気吸ってくる。あまり心配なくていいよ、母さん」

体育館を出て、俺はグラウンドの方へと向かった。

外は夜の闇に包まれてから大分時間が経っている。見上げた月は幸いにも明るく、照明には困らない。

しかし、グラウンドには、無数のテントが設置されていた。あわよくば少し走り込みでもしようかと思っていたのだが、どうやらそれは無理なようだ。

「京介くん」

後ろから声を掛けられる。

「愛菜……」

月明かりに柔らかな輪郭を浮かべて、愛菜が立っていた。表情には落ち着きが戻っており、俺が知っている愛菜だった。

「どうしてここに」

「京介くんが外に出てくのが見えたから」

「……少し走ろうかな、と思ってたんだけどさ。グラウンドがこれじゃあ、無理そうだな」

「ねえ、学校の屋上に行かない？」

愛菜の提案に少し驚いた。確かに落ち着ける場所だろうし、気分転換にはいいかもしれないが……。

「大丈夫なのか？ 校舎内に勝手に入って」

地震の起こった後で崩れやすくなっていることもあるし、監視員とかに見つかりでもしたらやっかいだ。

「鍵は閉まってるけど、割れてる窓から入れればいいし、それに今更だよ。ほら、行こっ！」

俺の手を取る愛菜。どうしても行くつもりらしい。

「まあ……いいけど」

「わぁ、風が気持ちいい」

屋上には割とすんなりと行くことが出来た。

満点の星空を仰ぐのに視界を阻むものは何もなく、その中で夜風にそよぐ黒髪を押さえる愛菜はとても神秘的に見える。

俺が適当にそこら辺に座ると、愛菜も横に来て、腰を下ろした。

「……昼間はごめんね。泣いたりして」

「いや、俺の方こそ取り乱してすまなかった。愛菜は何も悪くないのに」

翔の死を聞かされた時、愛菜がまるで別人のように見えてしまった。愛菜を見知らぬ別人と思い込むことで、俺は翔の死を否定しようとしたのだ。

しかし、愛菜は首を横に振る。

「気にしなくていいよ」

ふと、肩に重みを感じた。

「京介くんのこととは……よく分かってるから」

驚いて見ると、愛菜が俺にもたれかかっていた。

「愛……菜？」

「……知ってた？ 私ね、本当は京介くんのこと、ずっと前から好きだったんだよ？」

サアツ、と夜風が頬を撫でる。

「え？」

「あ、勘違いしないでね？ 翔くんのことはもちろん好き。でも、それ以上に京介くんのが好きだった。だけど、京介くんの横にはいつも、花凜ちゃんがいたから」

思えば、愛菜と二人きりになったのは、いつ以来だろう。愛菜といる時は、必ずと言っていいほど花凜か翔が一緒だった。

「……京介くんが翔くんの告白を手伝ってることを知った時、ああ、私じゃ駄目なんだって、決して私を選んでくれないんだって、す

ごく悲しかった。だからね、翔くんがそんな私に愛情を注いでくれたことが、とても嬉しかったんだ。幸せだった」

愛菜が自身の手を俺の手に重ねる。

「でもね、もう、その翔くんはどこにもいない」
絡まる指。

「私にはもう――」
潤んだ瞳が、俺を見た。

「京介くんだけなんだよ」

顔を上げて、愛菜はそっと目を閉じる。

「お願い……忘れさせて」

脳に浸透する、静かな言葉。

その唇に触れてしまえば、俺は楽になれるのだろうか。

この狂った世界をなかったことに出来るのだろうか。

地震のこと、花凜のこと、翔のこと。

全てを忘れることが。

だけ――

愛菜の胸の青いペンダントが月明かりを反射して、静かに輝く。

……残されたあいつの想いは？

『なあ、京介。お前、本当にいいのか？』

一年前。翔が愛菜に告白すること決意した日。

翔は、告白しに行く前に突然、俺に尋ねてきた。

『は？ いいって何が？』

『愛菜のこと。あいつ、サッカー部のマネージャーになった本当の理由は――』

何となくだが、翔の言いたいことは理解出来る。

しかし、俺はもう、決めていた。

『馬鹿。お前は愛菜のこと、本当に好きなんだろう?』

『ああ、そうじゃなきゃ』

翔の表情は、確固たる想いに満ちていた。

『こんなに悩んだりしない』

『だったら、俺に変な気なんか使うな。お前が勝ったら、俺に度胸が足りなかった、それだけのことだよ』

……俺は愛菜から離れ、立ち上がった。

『どうして……?』

「……ごめん」

ただ、ここで愛菜と唇を重ねてしまったら。

翔の存在がなかったことになってしまう。

それだけは絶対にしてはならない。

「俺……先に体育館に戻るよ」

俺は屋上の扉へと向かった。ドアノブに手を掛けたところで、一度振り返る。

愛菜は一人、夜の星空を見上げていた。

地震のせいで昨夜寝ていなかったからだだろう。落ち着かない体育館でも、眠りの世界に入るのは早かった。

目が覚めると、母さんと父さんはもう既に起きていて、愛菜のお母さんと雑談を交わしていた。

「あら、おはよう、京介」

「母さん、おはよう」

愛菜はあれからどうしたのだろう。あのまましばらく星空を見続けていたのだろうか。

そんなことを考えていると、愛菜のお母さんに話しかけられた。

「そうそう、京介くん。うちの愛菜を見かけなかった? 昨日、あ

の子より先に寝ちゃったんだけど、朝になったらいないのよ」

「愛菜が？」

つまり、愛菜はお母さんが眠った後に抜け出して、俺の所へ来たということか？

じゃあ、まさか今もまだあの屋上に？

「分かりました。俺、ちょっと探して来ますよ」

「お願い出来るかしら。翔くんのこともあるから、多分どこかで落ち込んでいると思うの。見つけたら励ましてあげて」

それは難しい相談だ。特に、愛菜の気持ちを知ってしまった今となっては。

翔の想いと、愛菜の想い。

俺は一体どうすればいい……？

体育館を出て、俺は校舎へと向かった。

すると、何やら辺りが騒がしいことに気付く。校舎の近くで人だかりが出来ていた。

何だろうと思って、人だかりの隙間から中を覗いて見る。

よく分らなかった。

人だかりの中に入って近づいて見る。

それでもよく分らなかった。

人だかりを無理やり& am p; #25620;き分けて、先頭に
出て覗き込む。

やはりよく分らなかった。

何かの塊のような物体が水溜りの上に横たわっていた。

……あれ、おかしいな。こんなもの今まで見たことがないのに、
何故か知っている気がする。

緑の上着。

でも何故か赤い。

黒いスカート。

でも何故か赤い。

四葉のクローバーのマークが入った青いペンダント。

でも何故か赤――

[illegible]

『やーい、サクラバのなきむしー』

『くやしかったらなにかいってみるよー』

俺がまだ小学生になったばかりの頃、同じクラスにいつも男子に虐められている少女がいた。

『うう……おねがいだから、わたしのふでばこかえしてよう』

入学したてであり、俺は——いや、俺らはその男子達と面識がなく、

『なあ、カリン』

『うん？　なんだ、キョースケ』

『あいつら、ちょっとえはりすぎでムカつかないか？』

『おう。ちようどアタシもそうおもってた』

当時、俺と花凜でお山の大将を気取っていたこともあり、

『おい、おまえら』

『なんだよ。いま、こいつにはなしかけて……いたッ!？』

『しるかよ。いまはオレたちがおまえらにはなしかけてんだ』

そこからは、先生が何人も止めに入る程の大乱闘だった。後で職

員室に呼び出され、散々に怒られたのを覚えている。

そうして職員室を出た所で、その虐められていた少女と初めて話したのだ。

『ほらこれ、おまえのふでばこ』

『た、たすけてくれて、ありがとう』

『べつに。アタシらはいいつらがムカついただけだし』

花凜が口笛を鳴らして見せる。

お辞儀していた少女は顔を上げ、

『あ、あの！ わたし、サクラバアイナっていうの！ その、よかつたら……ともだちに……！』

『まあ……いいけど。オレは、ツガルキョースケ』

『アタシは、キサラギカリン！』

『で、アイナだっけ？ んん……なんつーか、なくらいならオレにいえよ。その……なんだ。いったらオレがかならずたすけてやるから』

それを聞いた愛菜は、花咲くように微笑んで。

『……うんっ、キョースケくん』

それが、俺達と愛菜の出会い。

「そうだよ……必ず助けるって、あの時約束したはずなのに……！」
今どこを歩いているか、俺は自分自身でも分からなかった。

学校を飛び出し、息が切れるまで走り、それでも足を止めなかった。

あの場所から出来る限り離れないと、俺の精神はどうにかなってしまう。

——ねえ、聞いた？ 飛び降り自殺だって。

——嫌よね、もっと別の場所ですろって感じ。

「違う……！」

——恋人が死んじゃって、その後を追って自殺だとか。

——気の毒に。

「違うんだ、俺が……！」

俺が、愛菜のそばにいてやらなかったから……！
いつも愛菜と翔と待ち合わせをしていた、十字路に着く。

「おはよう、京介くん」

「愛……菜……」

手を伸ばすが、愛菜には届かず、すり抜けてしまう。

「おいおい、京介、何て顔してんだよ？」

「翔……翔！」

どんなに呼んでも翔は答えず、笑っているだけ。

民家の瓦礫に躓いて、転んでしまう。顔を上げると、愛菜と翔はもう、どこにもいなくなっていた。

「頼むから……俺を……置いて行かないでくれ……！」

生まれて初めて味わう絶望の底。もう何をどうしたらいいのか、俺には全く分からなかった。

かつて毎日花凜と二人で歩いた通学路を辿って、自宅へと向かう。

玄関の鍵は開けっぱなしのままになっていた。

「京介、早く学校に行こうぜ！」

そこにいたのは、かつての花凜。太陽のような笑顔で俺の横を抜け、玄関の外へと走って消えて行ってしまう。

「……お前も、俺を置いて行くのか……」

家の中は改めて見ると、ひどい有様だった。あらゆる棚が倒れ、窓ガラスは割れ、着衣やらガラスの破片やらがそこら中に散らばっている。

そして、二階の俺の部屋。

たった一日離れていただけなのに、随分懐かしく感じられた。

床に転がっている写真立てを拾う。

あの地震が起きる前にガラスカバーがひび割れてしまった、写真立て。もう一度中の写真を取り出して、見る。

そこに映った制服姿の俺達。皆、とびきりの笑顔で。

入学する高校も一緒であり、はしゃいで、嬉しくて、この後カラオケに行ったりして、本当に、

「本当に……楽しかった……」

ぼたぼたと写真に涙が零れて落ちる。

どうして、こんなことになってしまったのだろうか。

世界が変わる前まで、俺達は幸せだった。そして、その幸せは永遠に続くものだと思っていた。

しかし、全てを失った今となっては、数日前までの日常が夢の中の出来事だったように思える。

やがて俺は、近くに一つのガラス片を見つけた。

今の俺なら……出来る気がする。

そのガラス片は鋭く、凶器としては申し分ない。

「翔……愛菜……」

ガラス片に触れる。冷たい感触が今は心地よい。

俺はそれを握り締めると、切っ先を自身の手首に向けた。

「今から……俺もそっちに行くから」

これ以上、この世界にいる意味なんてないと思った。

こんな狂った世界なんて、もういらなと思った。

この世界に価値なんてない。何もない。

全てを失った。

だから。

——死ぬ。

俺は、ガラス片を振り下ろした。

『おい、花凜。お前、どこに何を貼ってんだ』

『んー？ それは乙女のヒ・ミ・ツ♪』

『ほぎけ、この男女』

俺が飲み物を下に取りに行っている間に、花凜は窓際で何やら不審な作業に勤しんでいた。

『いいじゃん、マーキングだよ、マーキング』

それは、日曜だった今日の午前中、花凜にショッピングという名目で散々連れ回され、挙句の果てに行ったゲーセンで撮った、プリクラだった。

『折角二人で撮ったんだし。記念は残しておかないと』

腕まであと、数ミリ。

俺は振り下ろす手を、止めていた。

死を覚悟した瞬間に、それが見えてしまったから。

ゆつくりと、ガラス片を持った手の平を、開く。

ガラス片に一枚のプリクラが貼ってあった。花凜が馬鹿みたいにピースして、俺がその横で呆れている——そんな宝石のように眩しい記憶。

……全てを失った——

本当に……？ 本当にそうだろうか？

「……嘘だ」

普通にしがみついて。

変わらない日常にしがみついて。

幸せにしがみついて。

関係の変化を恐れて。

日常の変化を恐れて。

不幸に怯えて。

壊れた世界から逃げようとして。

全て失ったんじゃない。自ら全てを捨ててきたんじゃないか、俺は。

「俺は……！」

ガラス片を投げ捨てる。もう捨てるのは、これだけでいい。

「ごめん……愛菜。翔。やっぱり俺
走ろう。」

そう思った。

恰好悪くたっていい。罵られてもいい。後悔は後でする。
がむしやらに走ろう。

何故なら、俺の想いは――

『京介ってさ』

俺のベッドの上に居座り、クッションを抱えながら、花凜が言っ
た。

『愛菜のこと……好きなのか？』

思いつきりジュースを吹く俺。

『ゲホッ、ゲホッ！ いきなり何言い出すんだ、お前は！？』

『だ、だってさ！ 京介って、アタシと愛菜じゃ……明らかに接し
方が違うじゃん』

『あのな、それはお前が悪い。常日頃あれだけお前のペースに巻き
込まれてたら、嫌でも接し方が変わる』

『アタシのせい！？』

すると、花凜は急にしゅんとなる。うーん、別に責めてるつもり
はなかったんだが。

『まあ……愛菜は確かに可愛いと思うよ。清楚だし、美人だし、男
が望む女の子の理想像って感じだしな』

『そ、そうか……』

『でも、俺としては』

花凜はクッションに半分顔を埋めて、俺の次の言葉を待っている。

俺は病室の扉を開け放った。

「花凜……！」

走り続けたせいで、足はがくがくするし、胸は凄く苦しい。

この間のようにベッドに座っていた花凜は、俺を見て、驚きの表情を浮かべる。

「き、京介！？ お前、そんなに急いで一体どうし――」

俺はベッドに近づくと、花凜をそっと抱き寄せた。

「京……介……？」

「俺としては、やっぱりお前と一緒にいた方が楽しいからさ……！」
大切なモノはいつだって側にあった。

世界が変わっても守りたいものが、俺にはあった。

たとえば他の全てを投げ打ってでも、失いたくない奴が俺にはいた。
だから、もう迷わない。

「花凜。俺はお前が好きだ」

花凜の肩が小さく震えた。

「でも、アタシ、昨日……京介にひどいこと……」

「そんなの忘れた」

「それに、アタシはもう足が――」

「馬鹿。そんなことぐらいで今更嫌いになれるかよ……」

「京介……」

強張っていた花凜の肩の力が抜けて行く。俺の背中に手が回った。

「アタシも……好き……大好き」

抱きしめた身体は、とても小さくて。

改めて、花凜が女の子なのだと知った。

この小さな身体で、足を失ってから、どんなことを想い、この病室から外の世界を見ていたのだろうか。

それと思うと、自然と涙が溢れた。

背中に回った花凜の手に力が籠もる。

「京介……ワリい……泣いていいか……」

「ああ、ごめん……俺も泣くわ……」

「うわあああああ——」

俺の腕の中で、花凜は泣いた。泣き続けた。

花凜はまだ、翔のことも、愛菜のことも、知らない。

それを知った時、花凜はきつと今よりもずっと辛い思いをするだろう。

俺が経験したように、深い絶望に飲み込まれそうになるだろう。

その時に俺に出来ることなんて、たかが知れている。

でも、だからこそ、俺は花凜のそばにしようと思った。

少しでも花凜の悲しみを和らげられたらいい。

少しでも一緒に泣いてやれたらいい。

少しでもそばにいてやれたらいい。

花凜という存在が今、こうして俺を絶望の底から救ってくれたように。

「ああ、それにしても本当に——」

温かい。

花凜を抱きしめながら、そう思った。

— E N D —

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4949e/>

quake

2010年10月8日15時19分発行